Vol.91　実戦を想定した際の演奏を考えてみる　～その 1～

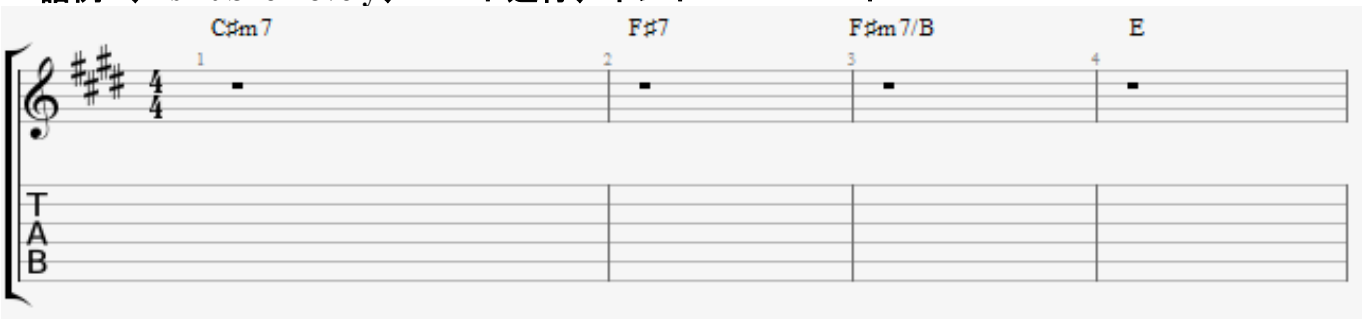
では、『10 分トレ』vol.91、始めていきましょう。

さて、長らく続けてきたこの講座も、後 10 本で終わりとなりました。

これまでは基本スキルの習得がメインだったので、最後は実際の現場での演奏を考えてみるとしましょうか。

題材については色々候補があるのですが、まずは Stevie Wonder の名曲である“ Isn't She Lovely”の進行で見ていきましょう。

譜例 1、Isn't She Lovely、コード進行、イントロ～A パート



まず、Isn't She Lovely では、この進行がイントロから A パート一杯まで続くことになります。

3 小節目の F♯m7/B は、コードの構造的には B7sus4 や A/B と同じです。(※楽譜によっては B7 になっている事もありますが、原曲のサウンド的には B7sus4 系が近いと思います)

全体としては、上記進行をイントロとして適当に繰り返した後、A パート 8 小節、B パート 8 小節の全 16 小節のパターンですね。

キーは E で、リズムがシャッフル、通常は、ヴォーカルかリードメロを弾く人(パート)が誰かしら居ます。

で、例えば、バンドの楽器隊が、ギター(自分)、ベース、ドラム、鍵盤の 4 人だとして、そこに歌か何かしらの楽器でリードメロを取る人が加わった場合、上記の進行をどの様に演奏するべきでしょうか？

自身の役割としてはバッキングですね。エレキとアコギでもプレイの傾向は変わりますが、ここではエレキと言う事にしましょう。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

曲を知らなかったり、知っていても今イメージが沸かない場合は、youtube などで原曲を聴いてみて下さい。

まずは、楽曲のフィールとサウンドの把握が必要です。

とりあえず、原曲を聴いてみると、

・基本的には明るい雰囲気の曲、
・軽快なリズムフィール
・でも「ファンク系のタイトにキレ良く」と言うよりは少しルーズ(≒スムース)な感じ
・「ターッ、ターッ(カ)、(ン)タカター(ッ)」と言う感じのリズムパターンが根底にある

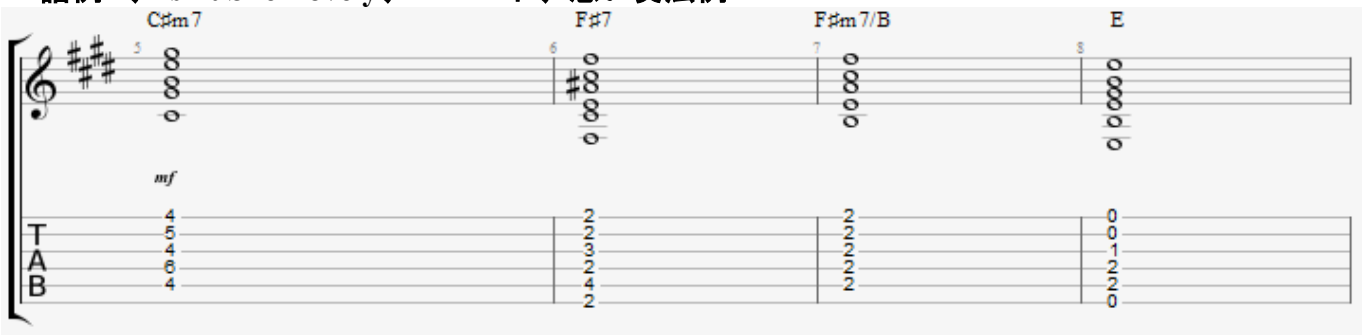
と、この様な要素が見つかりますね。

ギターのサウンドメイキングに関しては、バッキングならクリーントーンで、ピックアアップセレクトはハーフトーン系、奏法はカッティング寄りのストロークでしょうか。(※ギター本体で言うとシングルコイルのストラト系が合いますが、そこは手持ちのギターで構いません)

さらに今は、バンドが 4 人編成でベーシストが居るので、ギターはコードのベース音を鳴らす必要があまり無いかもしれませんね。(※少なくとも、低いレンジでベース音を鳴らしまくるのはやめておきましょう)

で、ここまでの条件を踏まえると、絶対にやってはいけないのが、以下の様なヴォイシングで、アコギみたいにジャンジャカとストロークする事です。

譜例 2、Isn't She Lovely、A パート、悪い奏法例



例えばこれでゴリゴリのストロークをすると、かなりアンサンブルの邪魔です笑。

もう少し言えば、ヴォイシング自体は弾き方によって使う可能性もあるのですが、これを押さえて、常に全弦鳴らし続けたりするのはちょっと重いかもしれませんね。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

E のオープンコードも、この状況ではあまり使わないと思いますが、もし僕がこのヴォイシングを使う場合は 5、6 弦は鳴らさずに、4〜1 弦のみを弾くかもしれません。

と、言う事で、まずは避けるべき例を挙げたわけですが、「ならば自分はどう弾くか？」を考えてみて下さい。

結局のところ、最終的には「厳密な意味での正解は無い」と言う話になるのですが、原曲のイメージを元にした、「その曲の方向性にあったプレイ」はあるわけです。

まずはそれを最初に、「その曲のベーシック」として弾ける(出せる)様にしておくと良いですね。

Youtube で検索してみると、色々人たちが色々なアンサンブルで演奏しているので、参考にしてみて下さい。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved